

みぢかな「信頼学」

第1回 社会的信頼学とはなにか？

関西大学・STEP・センター長
与謝野有紀

＜人はいつも信頼と共に生きている＞

「あなたが信頼する人は誰ですか？」と聞けば、皆さんはきっと、家族、友人など、特定の誰かを思いうかべることでしょう。顔をはっきりと思い出せる人の場合もあるでしょうし、インターネット上の知り合いなどで顔は知らないという場合もあるかもしれません。その人の性別、年齢、職業、住んでいる地域、家族構成など詳細な情報をもっている場合もあれば、その人のプロフィールをほとんど知らないといった場合もあるでしょう。あなたとの関係はいろいろでしょうが、とにかく「他の誰かではなく、ある特定の誰か」を信頼できる人として思い浮かべることができるはずです。この信頼できる「特定の誰か」は、「他の誰か」とどう違うのでしょうか？

「いつでも相談にのってくれる」、「困ったときにきっと助けてくれる」、「頼んだ事を必ずきちんとやってくれる」、「正しい情報を教えてくれる」、「役に立つアドバイスをくれる」など、あなたが信頼している人は、「あなたの期待にこたえて、きっと〇〇をしてくれる」人なはずです。この「きつと〇〇をしてくれる」という

ところに社会的信頼の本質があります。

誰でも、他人がどのように行動するかを完全に知ることはできません。ですから、人々は他者と一緒にいるとき、いつでも「どうなるかわからない」部分を持ったまま過ごしています。つまり、不確かな世界に生きていることになります。ですから、「きっと〇〇してくれるはずだ」あるいは「きっと××な悪いことはしないはずだ」という推測がないと、われわれは誰かと一緒にいることはできませんし、もちろん、相談したり、助けを求めたりすることもできません。

このようにわれわれは、不確かな世界で、誰かに何かを期待し、その誰かがどうするかを推測して生きています。この「誰かの行為に対する推測」を、社会的信頼と学問的に呼んでいます。

この社会的信頼には、強い、弱いがあります。あなたにとって助けになることを「間違いなくやってくれる！」とあなたが考えるとき、強い信頼を持っていることになります。また、「期待通りにやってくれる可能性がないわけではない」というときには、信頼はそれほど強くはありません。こうして、(意識しているにせ

よ、無意識にせよ)「100%期待できる～期待は0%だ(全く期待できない)」まで、人々は他者に対していろいろな推測をもって日々を送っています。

ところで、この話は、ある誰かに対する信頼の話からスタートしました。では、知らない他人に関してはどうでしょうか？たとえば、一人で電車に乗っているとき、一人で商店街を歩いているとき、私たちは多くの見知らぬ人に囲まれています。このとき、私たちは知っている誰かを信頼して、その場所にいるわけではありません。見知らぬ多くの人々が自分の周りにいますが、その人たちが、「私の財産や生命を狙っている」と考えると、とても怖くて電車にのることも、歩くこともできないでしょう。とにかく用心し、びくびくしながら、「人を見たら泥棒と思え」と言い聞かせながら生活することになります。そのような時代や地域で私たちが生きていたことがあるのも事実なのでしょうが、今の日本を見てみると、電車の中で、鞆を網棚において気持ちよさそうに寝ている人を見つけるのはそんなに難しいことではありません。他人はすべて泥棒だと推測したら、とてもそのようなことはできないはずですが。こうした例は、買い物の場面でも、人助けの場面でも多く見出すことができます。これは、見知らぬ人々に対して、私たちが、社会的信頼を抱いて生きているという一例です。商店街に気楽に買い物に出られるのも、大学で講義に集中できるのも、子どもが紙芝居の口演に集まり笑っていら

るのも、他の人々に対する「私を裏切つて、ひどい目に合わせようとはしないだろう」という推測が基礎にあるからです。



このような推測は、他の人々は「他者を裏切らないよい意図」をもっているという考えや、「罰を受けるのを恐れて、そんなことはしないはずだ」という考えなどに支えられています。この二つを区別し、後のものを安心感、前のものだけを信頼感として扱う考え方もありますが、この話はまたいずれ稿を改めてしたいと思います。

また、こうした推測が間違っただけで、他人からひどい目にあわさってしまうという例もあるのですが、この問題をどう考えていくかについても次回以降にお話ししましょう。

ところで、ここでは信頼の前にわざわざ「社会的」という言葉をつけてお話ししていますが、これには理由があります。信頼は、工学など機械を扱う分野でも大きな課題となっていて、機械の動作、工場や発電所の安全性などは、信頼と関わるテーマだからです。また信頼性工学と呼ばれる分野もあり、機械との関連で作動ミス、操作ミスをなくすための研究がすすめられています。

社会的信頼に関する学問は、このような研究と異なり、人間が、「他の人間」、「人間からなる組織」、「人間が担う社会制度」をどのように信頼し、そのことが社会的にどのような影響をもたらすのかを研究していきます。社会科学と工学的研究は無関係ではありませんが、問題の扱い方の違い、考え方や概念に大きな違いがあります。これらについても、次回以降で改めてお話ししたいと思います。

＜人々の信頼は、大きな資本になる＞

「他人から信頼されることは、なにものにも代えがたい財産だ」とか、「人間どうしがお互いに信頼できる社会が一番いい」といった言葉を、地域や企業のお話しを伺った際に聞くことが多くあります。この言葉は、多くの人が、「人が誰かを信じることは、社会にとって重要な財産、資源だ」と考えていることを意味しています。

ところで、これと対応するように、パットナムというアメリカの政治学者は、イタリアの北・中部、南部を比較して、人々一般に対する信頼が多い社会では、政治的、経済的なパフォーマンスが高くなるという研究結果を出しました。また、これと前後するように、コールマンという社会学者も、親同士のつながりが緊密であるほど、教育効率が高くなるという分析を行い、さらに、人と人とのつながりと社会的効率の間の関係を理論的に検討しました。これらの研究から、「社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）」とい

う考え方が大きく展開し始めています。この考え方は、人と人との「つながり」や「絆」が、資本としての性格をもつと考えるものです。

資本にはいろいろなものがあります。お金、株式、建物、工場など経済学が伝統的に扱ってきた資本は、近年では「古典的資本」と呼ばれたりしています。また、知識、技能など人々が身にまもっている能力も「人的資本」として、20世紀の半ば過ぎから資本の一つに数えられてきました。そのほか、人々の立居振る舞い方、芸術的な嗜好と知識も資本の一つに数えられており、これらは「文化資本」と呼ばれています。また、これらの資本が、個人や個々の企業、特定の集団などの所有を前提にしているのに対し、社会全体の財産という視点から、社会基盤などを「社会共通資本」としてとらえる見方もあります。これらは、それ自体がさらに新たな資源を生み出すという性質をもつことから、他の資源とことなり、「資本」として特別な位置を与えられて議論されています。

ところで、20世紀末から議論が始まり、21世紀に入って最も注目を集めている新たな資本が、先述の社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）です。この定義を巡って、現在、活発な議論が学会で展開していますが、次の3つの要素がその中心となっているとされています。

1. 他者への信頼感
2. 社会的規範
3. 社会的ネットワーク

この3者は、人と人との協力・共同が効率的になされる条件を整理したものといえます。最初の、「信頼感」は、他者は、どのくらい信頼できると思うか、という個人の他者に対する推定を意味しており、先にお話した社会的信頼とっているものにあたっています。2番目の社会的規範、3番目の社会的ネットワークも、実は、信頼をキーにして整理することができます。手短かに言えば、社会的信頼が多い社会は、資本の大きな社会だということになります。では、社会的信頼感が高い社会では、他の資源が増えていくという傾向は本当にみられるのでしょうか？

ナックとキーファーという経済学者は、いろいろな国々のデータを整理し、社会的信頼感と経済成長との関係を統計的に検討しました。その結果、社会的信頼感が大きな国では、経済成長しやすいという結論を得ています。世界銀行は、こうした結果をもとに、社会的信頼を、開発援助における鍵として捉えるようになり、1996年には社会関係資本に関するワーキング・グループを組織しています。

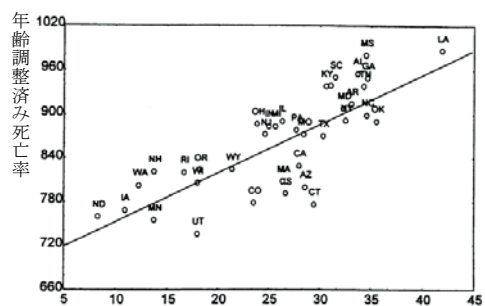
<信頼は人々の社会生活を規定する>

社会的信頼は、経済効率と関わるばかりではありません。犯罪など、われわれの社会生活を脅かすことがらとも関係しています。

たとえば、シカゴ大学のサンプソンらは、地域の人々への信頼感などが、犯罪に対してどのような効果をもつかを検討

していますが、「一般には犯罪が起りやすいとされる貧困地域であっても、地域の信頼感が高い地域では、犯罪を抑止するような協力関係がおこりやすく、犯罪率が低く抑えられる」と結論しています。

では、逆に、人々への信頼が損なわれているとき、どのような影響が社会に現れるでしょうか？ハーバード大学の公衆衛生学者であるカワチは、社会学的な視点から人々の健康状態や平均余命の問題に取り組み、図1のような関係をアメリカの各州のデータから導き出しています。図の横軸は、「人々は付け入る機会があれば、あなたを利用しようとする」と思う人の比率で、右側に位置する州ほど他者に対する信頼感が低いといえます。また、縦軸は、州ごとの死亡率（高齢化の影響などを調整しています）ですが、この図は、他者への信頼が低いほど、死亡率が高くなる傾向があることを示しています。



「人々は付け入る機会があれば、あなたを利用しようとする」と思うかという質問に、「そう思う」と答えた人の割合

図1 アメリカにおける不信感と死亡率の関係

Kawachi et.al (1997) Figure2 より引用

州ごとに、社会的信頼感以外にもいろいろな状況がことなりますが、それらを

考えにいたした分析をしても、同様の結果となることをカワチらは示唆しています。

次に、日本について、筆者が近年分析した結果を示します。日本では、平均余命はほぼ一貫して上昇を続けており、平均余命と信頼感の関係は、いまのところははっきりとは見いだされていません。ところが、死因別に検討すると状況は異なります。

この10年あまりの間で、特に際立って増えた死亡原因は自殺です。警察のまとめた自殺者数は、1998年に3万人を超えて以来、2010年まで13年間3万人を超えたままで、この13年間に約40万人が自殺でお亡くなりになっています。国際的にみても日本の自殺率はかなり高いところに位置づいており、アメリカ合衆国と比べると約2倍の高率になっています。また、男性の自殺率の急速な上昇が特に危惧されています。

日本において、信頼感を測定できた県に限って、信頼感と自殺の関係を示したのが以下の図です。

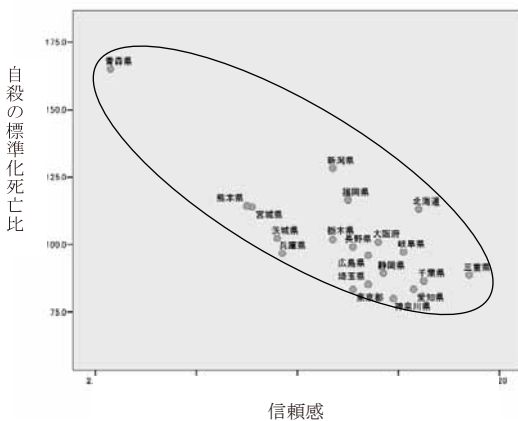


図2 日本の自殺率と信頼感の関係
与謝野(印刷中)より引用

図の自殺の指標は、100という値を全国平均としたもので、年齢を調整したうえで全国平均にくらべてどのくらいの高さであるかを表しています。この指標は、標準化死亡比といいます。横軸は、「ほとんどの人は信頼できる」という質問への回答の各県の平均を表し、右に行くほど社会的信頼が高い県ということになります。この図は、さきほどのカワチらの図と同じような結論を示しています。カワチらの図では、「社会的信頼が低い社会では人々は不健康になりやすく、死亡率が高い」ことを示し、日本のデータは「社会的信頼が高い社会では自殺が少なくなる」ことを示しています。日本の分析は都道府県単位でおこなっていますが、各都道府県の約50の特徴を考慮しても、自殺に対する社会的信頼の抑止効果は消えません。

日本とアメリカ合衆国とではさまざまな社会状況異なります。それでも、「社会的信頼の有無が人々の生活基盤に大きな影響を与えている」という点では、両国は共通していると言ってよいでしょう。

<社会的信頼学とその実践の試み>

これまで述べてきたように、社会的信頼学は、人々が他の人々を信じている社会と、そうではない社会で何が異なるのかを明らかにしていきます。同時に、どのようにして社会的信頼の高い社会にできるのかについても考えていきます。

まだまだ研究は始まったばかりで、これから明らかにしなければならないこと

が沢山あるのですが、たとえば、つぎのようなこともわかり始めてきました。すなわち、社会的信頼の高い社会であるためには、「地域の中の格差が小さいこと」が必要な条件の一つとしてあげられるということです。この条件は、平等が社会的信頼が高い社会であるための前提条件であることを言っているのみで、「平等な社会にすれば、社会的信頼が高い社会にできる」ということはできません。この点でも、現在の知識はまだまだ限定されています。それでも、こうした条件を一つ一つ検討していくことで、社会的信頼が高く、人々の共同が起りやすい社会、さらには、人と人々が支えあい、幸福感の高い社会を生み出すための見通しが得られるのではないかと考えています。

このような取り組みを学問的に行い、またその成果を実践的に地域に還元する目的で、国および関西大学の援助を受けて社会的信頼システム創生センター（略称：STEP）という名称の研究センターが昨年開設されました。この小さな一文が掲載されている冊子（『みぢかな信頼学』）も、地域の方々から学んだ事を学問的に整理し、それをフィードバックするセンターの実践活動の一環として刊行されています。

また、STEP は、地域研究と地域活動の実践拠点として、日本で一番長いといわれる商店街「天神橋筋商店街」のアーケードの中に、関西大学・リサーチアトリエという名称の場を開設しています。関西大学・リサーチアトリエでは、地域

の方々としながら、地域の文化活動などを持続的に支えています。また、それらの観察結果などを大学内にもちかえり、学問的に情報を整理した後で、その知見を、再び実践的にフィードバックすることをもくろんでいます。アトリエでは、ガラス書という地域独自の技術をつかった芸術作品を展示したり、紙芝居を無料で子どもたちに提供しながら、おとな、こどもが、新たなつながりをもつ機会をつくったり、地元のステンドグラス作品の展示会や絵画展を行ったり、大学の研究の成果を一般向けの講演として開催したりしています。



土居年樹・天神橋筋商店街連合会会長（左）と楠見晴重・関西大学学長（右）

関西大学・リサーチアトリエには、さまざまな人、もの、情報があつまっています。大学が知識と文化のハブ（結節点）として機能し、そのことで、地域のつながりを活性化するお手伝いができるつつあると考えています。

<信頼の仕組を知り、信頼をみぢかに>

『みぢかな信頼学』では、これからも社会的信頼学の最先端と地域の人々が培

ってきた信頼をめぐる知性について紹介していきたくて考えています。また、社会的信頼学の基本的な言葉とその用法、その意味の違いなどについても、すこしずつ紹介していきます。

きっと皆さんも、たくさんの疑問をお持ちのことと思います。たとえば、

- ・知っている人への信頼と見知らぬ人への信頼をめぐる話はどう違うのか？
- ・工学でよくつかわれる信頼性という言葉と、社会的信頼はどう関わるのか？
- ・信用という言葉もよくつかわれるが、信頼と信用はどう違うのか？
- ・他人に対する信頼と、社会や組織に対する信頼はどちらが先にあるのか？
- ・企業や大学が信頼され、人々を集めたり、結び付けたりするように機能できる条件は何か？
- ・信頼が推測だというなら、他人がよいことをするのを推測するのも、悪いことをするのを推測するのも、どちらも信頼なのか？

いくつもの疑問が社会的信頼をめぐって出てくるはずですが、これらについても、次号以降で、少しずつお話ししていきたくて思います。

現在までに、学問的に明らかにされてきている「社会的信頼のしくみ」は決して単純ではありません。ですが、一つ一つの言葉の意味、言葉と言葉の関係を整理して理解すれば、誰にもすっきりとわかるはずですが。皆さんの周りにたくさんありながら、皆さんが意識してこなかっ

た「信頼」が、皆さんにとってよりはっきりとみぢかに感じられる、そんなお手伝いをこの冊子を通じてしていきたくて思っています。

引用文献

- Kawachi, I. et.al 1997 “Social Capital, Income Inequality and Mortality”, *American Journal of Public Health* 87(9): 1491-1498.
- 与謝野有紀（印刷中）「格差、信頼とライフチャンス ―日本の自殺率をめぐる―」 齋藤友里子、三隅一人編『現代の階層社会 3 流動化のなかの社会意識』東京大学出版会。